

第十五回南のシナリオ大賞応募作品

あの夏のジンベーさん

登場人物

木下将太（22）

ジンベー

陣野茂子（52）

バスガイド（20）

将太（M）俺の名前は木下将太22歳。大学4年。実家は小さな工場を営んでいる。

バスガイド「皆さん、あんまりパイナップルいっぱい召し上がりましたでしょか？」

将太（M）もう夏なのに、まだ1社も内定をもらえずフラフラしてる俺。工場を継ぐって事で就職活動を終わらせたい。

茂子「ね、将太ちゃん」

将太（M）ぎっくり腰のおふくろの代理社員旅行の沖縄ツアーに参加してる。工場継ぐならパートさんとの交流も大切だろう。

茂子「ちょっと。将太ちゃん、奥さんの様子どう？ パーットの皆も一緒に来るの楽しみ

にしてたから残念よ」

将太（M）「この人はパートの茂子さん。俺が小さい頃から働いてるベテランさん。大きな口につぶらな目……何かに似てる？」

将太「あー大丈夫じゃないっすかね。親父もいるし」

茂子「社長、家事やれるかしら？」

将太「あはは。どうでしょ」

茂子「お兄ちゃんの明人ちゃん。こういう時にいてくれたらいいのにねえ」

将太（M）「ほんと、困った兄貴だよ。何かから逃げてんのか知らねーけど、ずっと帰って来やしない。」

バスガイド「ちょっと道が混んでいるようなので、美ら魚水族館に行く前に紅イモタルト工場に向かいます」

茂子「見るだけの魚より、食べられる紅イモ
タルトの方がいいわー」

将太「（棒読み）あはは。そうですねー」

将太（M）せっかく来た沖縄。俺は美ら魚水
族館でジンベイザメが見たかったけど、パ
ートさん達は甘いモノの方がうれしいか。

SE バスのドアの開閉音

バスガイド「では自由時間となります。出来
立てほかほかの紅芋タルト、召し上がって
下さいね」

将太（M）そこらじゅうに甘ったるい匂いが
漂っている。甘いものが苦手な俺は少し酔
いそうだ。

SE 賑やかな店内

将太（M）甘くないモノ売ってないのかよ。

SE 店員の客寄せの声

将太（M）おっ。泡盛じゃん。これ土産で渡して、親父に工場継ぐこと言ってみるか。

SE スマホ着信音

将太（M）おふくろからのメールだ。ん？
なんだこれ？ 兄貴が帰ってくるって？
気もちわっる。ハートマークばっか。

SE 店員の客寄せの声

将太（M）なんなんだよ！ このおふくろの
浮かれっぷり。パートさんの相手してやっ
てんのは俺の方だったうのに！

将太「すみません！ 泡盛の試飲、他の種類

も飲ませてもらえませんか！」

SE バスのドアの開閉音

バスガイド「皆様お揃いでしょうか？ ちよ
っと時間がおしてますので、水族館の滞在
時間が短くなってしまいう見込みです」

SE 乗客達のひそひそ声

将太「ウィーック」

茂子「（大声で）うちの将太ちゃんがすいま
せーん」

将太「ふぁーい、すいませーん！」

バスガイド「そ、それでは、本日最後の観光
になりますので残り時間お楽しみ下さい」

SE バスのクラクション

茂子「ちよっと。将太ちゃん、大丈夫？」

将太「はい！　ぜんっぜん大丈夫れす！」

茂子「何があったのか知らないけど、水族館行かないでバスで休んでたら？」

将太「何言ってるんすか！　俺がこの旅行で唯一楽しみにしてた、美ら魚水族館のジンベーザメを見ないで帰れねーつつうの！」

SE　バスのドアの開閉音

バスガイド「それでは閉館まであと30分ほどになりますので……」

将太（M）何もかも嫌になった俺はバスを降りてすぐに走り出した。これ以上、パートナーさん達と一緒にいたくない。

茂子「ちょ、ちょっと将太ちゃん！」

将太（M）足元はおぼつかないが、なんとかジンベエザメの展示エリアに走りついた。

SE 閉館時間のアナウンス

将太（M）閉館間近だからか。貸し切りみたいに、だーれもない。俺は水槽の真ん中を陣取った。

SE 水槽の中の空気の音

将太（M）1頭だけになった雄のジンベイザメ。雌はこの前死んじゃったんだ。優雅に泳いでやがる。悩みなんて無いんだろう。

将太「すげーでけー」

SE 水が大量に吸い込まれる音

将太（M）ジンベイザメが口を開けてオキアミを吸い込む。その口をじっと見つめていると急に吸い込まれるような感覚になり、

将太 「うっ、うわー！」

将太 (M) 俺は足元から崩れ落ちるように、
気を失った。

SE 水槽の中の空気の音

将太 (M) 目を開けると、目の前にジンベ
イ
ザメ？ え？ なんで？！

ジンベー 「大丈夫だよ」

将太 (M) え？ 話せる？ 息もできる？

将太 「あ、あの……」

ジンベー 「僕はジンベー。君は？」

将太 「え？ 俺？ 将太、だけど」

ジンベー 「将太は僕に会いに来てくれたんで
しょ？」

将太 「ま、まあ」

ジンベー「水の中のこと、外の誰にも聞こえないよ」

将太「え、そうなの？　ちょっと怖いな」

ジンベー「せっかくだから、何か秘密、お話してよ」

将太「は？　秘密？」

ジンベー「うん。だって誰にも聞こえない」

将太「いや。聞こえないからって何で秘密を話さなきゃ」

ジンベー「（被せるように）じゃー僕から話すね」

将太「あ、はい」

ジンベー「僕、最近、一人になっちゃったんだ。メスの子がいなくなっちゃって」

将太（M）あ。雌のジンベイザメが死んじゃった事、知らないんだ。別のところに移されちゃったからか。

ジンベー「でもね。寂しくないんだ」

将太「え？　なんで？」

ジンベー「だって、メスのあの子は僕が行けない良いところに行ったんだと思うから」

将太「良いところ、ね……」

ジンベー「でも皆、メスの子いなくてかわいそうだねって何度も言うの。だから時々、ちよっと悲しそうなフリしたりしてる」

将太「ジンベーって、空気読むんだね」

ジンベー「え？　空気って吸ったり吐いたりするものでしょ？」

将太「あはは。確かに」

ジンベー「はい。次は将太」

将太「あ、えーっと俺の秘密は……」

ジンベー「何？　何？」

将太「まー、あれだ。俺、次男で」

ジンベー「次男？」

将太「えーと、二番目に生まれたのね。だから先に、一番目に生まれたのがいる」

ジンベー「将太は二番目」

将太「で、一番目が、家、えっと水槽みたい

なのを出てったつきりだったんだけど」

ジンベー「水槽から出てったの？ 大変！」

将太「もう戻ってこないから、俺が水槽を守らなきゃーって思ってたのに、そいつが急に戻ってくるとか言い出して」

ジンベー「よかった。水槽に戻らないと危ないもん。干からびちゃう」

将太「ほんと。干からびて戻ってこなきゃいけないさ。そしたらおふくろ、あ、俺を生んだ人ね。バカみたいに喜んで」

ジンベー「干からびないで戻ってくるんだもんね」

将太「だから俺の事なんてどうでもいいんだなーって思ってさ。二番目に生まれた事って、そんなに価値無いかないって」

ジンベー「二番目でも生んでくれた人を喜ばすことはできないの？」

将太「みんな、一番目がいいんだよ」

ジンベー「二番目はずっと、そんな気持ちを秘密にしてなきゃならないの？」

将太「そうかもなー」

ジンベー「一番目だろうが二番目だろうが、
将太は将太なのにね」

将太「ま、第二子なんて、そんなもんだよ」

ジンベー「秘密お話ししてくれてありがとう」

将太「え？ それだけ？」

ジンベー「うん。だって秘密ってここだけの
話でしょ？」

将太「そ、そうだけど。アドバイスとか、こ
うした方が良くよとか」

ジンベー「うーん。じゃあ僕が思ったのは、
水槽を守るのが1人から2人に増えたんな
らいいんじゃないって事」

将太「増えるって、そんな簡単な……」

ジンベー「ご飯が減っちゃうのとかは嫌だけ
ど、1人より2人の方が楽しいし」

将太「それって……」
ジンベー「あれ……僕……メスのあの子がい
なくて寂しいのかな……」

将太「お、俺！ また来るからさ！」

ジンベー「え？　ほんと？　うれしい！」
将太「うん！　だから寂しくないだろ！」
ジンベー「わーい！　うれしい！　将太、う
れしいよ！」

将太（M）ジンベーが大きな口を開けて一氣
に水を吸い込んだ瞬間、俺も一緒に吸い込
まれた。

将太「う、うわー！　！」

SE　水を大量にかけられる音

将太「ゲホゲホ！」

茂子「将太ちゃん、大丈夫！？」

将太「え？　あれ？　ジンベー？」

茂子「やだもー寝ぼけて。ずっと1番目とか
2番目とかブツブツ言ってたわよ。はい、
タオル」

将太（M）「うちの工場の名入りタオルだ。」

茂子「そんなに焦らなくていいんじゃない？

将太「え……」

茂子「まだ自分のやりたいこと見つかってな

いんでしょ」

将太「そ、それは……」

茂子「うちの子ども同じだったな」

将太「やっぱ、次男が工場継ぐって、おかし

いんすかね？」

茂子「そうね」

将太「え！？」

茂子「まー、まだまだ時間あるし」

将太「もうすぐ俺、23っすよ」

茂子「ジンベイザメなんて、150歳まで生

きるんだって。そう考えたら将太ちゃんな

んてまだ2割も生きてない」

将太「え？　なんで、ここで豆知識？」

茂子「そりゃ社長も奥さんも、継いでくれる

って聞いたたら、うれしいと思うよ」

将太「じゃあ」

茂子「でも内定取れないから継ぐってのはバ
レルと思う」

将太「え……なんでそれを……」

茂子「大丈夫。秘密の話、聞かなかったこと
にしてあげるから」

将太（M）この人、なんで秘密の話知ってん
だ？俺は茂子さんの顔をじっと見た。

茂子「ま、内定とれてないってのは、おばち
やんの勘だけどねーって、聞いている？」

将太「に……似てる！」

茂子「へ？似てる？あたし？何に？」

将太「（笑いながら）帰ったら俺、親父と兄
貴と一緒に土産の泡盛飲みます！おふく
ろにはシークワ―サージューズで！」

SE 閉館アナウンスと沖縄民謡

（終）